

我が県土
支え育む
希望郷



美しい

県土づくりNEWS

目次

- 2 三陸沿岸道路釜石山田道路 大槌IC～山田南IC 開通
- 4 【復興関連道路】主要地方道野田山形線野田工区開通！
- 6 復興道路等の整備による「ストック効果」を紹介します！
【第15回】
「岩手の未来を切り拓く復興道路シンポジウム～沿岸と内陸を結ぶ釜石道全線開通へ～」を開催しました！
- 8 県土整備部 県土政策研究会の取組～将来の県土づくりを見据えて～

2019年

1月

岩手県 県土整備部
手づくり広報誌第174号
平成31年2月4日発行
編集 県土整備企画室



三陸沿岸道路 釜石山田道路 大槌IC～山田南IC 開通 ～宮古市から大槌町まで約35kmがつながる～

1月12日(土)、国のリーディングプロジェクトとしてかつてないスピードで整備が進められてきた三陸沿岸道路のうち、釜石山田道路「大槌IC～山田南IC」が開通しました。区間延長8.0kmの開通により、宮古市から大槌町までの約35kmが自動車専用道路で繋がりました。これにより、県内に計画されている復興道路総延長359kmのうち、195km(54%)が供用済みとなりました。

物流や観光面での活用や、緊急時の輸送路や救急搬送ルートとしての活用など、道路の活用による地域の活性化が期待されます。



多くの関係者のご列席のもと行われた式典において、テープカット・くす玉開き

復興道路 E45 三陸沿岸道路 釜石山田道路「大槌IC～山田南IC」 開通！

～三陸沿岸道路がはじめて大槌町へ到達～

道路建設課

平成 31 年 1 月 12 日（土）、山田町船越にて、復興のリーディングプロジェクトとして国が整備を進めている三陸沿岸道路 釜石山田道路「大槌 IC～山田南 IC」の開通式が国、県、山田町及び大槌町の共催で開催されました。

式典には、池田 国土交通省道路局長、達増 知事、佐藤 山田町長、平野 大槌町長をはじめ、国会議員、県議会議員、地域住民の方々など多数の関係者が出席しました。

達増 知事等による挨拶、国会議員の方々から祝辞、地域の代表者として、阿部 山田町商工会会長から開通に期待する声が発表されました。

その後、テープカットとくす玉開き、開通パレードなど、セレモニーが行われました。



達増 知事 挨拶



鈴木俊一 衆議院議員 祝辞



期待の声 山田町商工会 阿部会長



テープカット、くす玉開き



開通パレード

会場では、復興道路のパネル展示のほか、山田町から「かき汁」のお振る舞い、中須賀大神楽保存会による「中須賀大神楽」の披露、おおつち保育園「Children drums」による和太鼓の演奏が行われ、開通に華をそえました。



かき汁のお振る舞い



中須賀大神楽



おおつち保育園「Children drums」

今回の開通により、三陸沿岸道路がはじめて大槌町へ到達し、大槌町から山田町を經由し宮古市までの約35kmが自動車専用道路で繋がります。

このことにより、津波浸水区域を回避する**緊急時の輸送路確保**や山田町から県立釜石病院への速達性向上による**救命活動の円滑化**など、**様々なストック効果が期待**されます。

また、いよいよ今年の開催となりました「**三陸防災復興プロジェクト2019**」や「**ラグビーワールドカップ2019™**」においても、本路線を利用して、**国内外から多くの方々に訪れていただくことが期待**されます。

これで、県内に計画されている復興道路359kmのうち、供用済延長は195km(54%)となりました。

県では、引き続き、国や市町村、関係者の皆様と連携し復興道路等の早期の全線開通に向け全力で取り組んでいきます。



開通後の状況①(本線上)



開通後の状況②(大槌IC)

【位置図】



【事業概要】

区分	路線	釜石山田道路
区間		大槌IC～山田南IC
延長		8.0km
車線		2車線
幅員		7.0(13.5)m
設計速度		80km/h
道路種別		自動車専用道路
事業期間		H5～H30 大槌IC～山田南ICの工事着手はH23
事業者		国土交通省



【復興関連道路】主要地方道野田山形線野田工区開通！

県北広域振興局土木部

県が「復興関連道路」として整備を進めてきた主要地方道野田山形線野田工区（L=1,500m）が平成30年12月25日に開通しました。

開通に先立ち、県北広域振興局主催による開通式が、来賓、工事関係者、地域住民など約100名出席のもと、盛大に執り行われました。

式典では、南県北広域振興局長による式辞、小田野田村長、中平県議会議員、貳又野田村議会議員をはじめとする来賓の方々による祝辞、高橋県北広域振興局土木部長による事業経過報告、テープカット及びくす玉開披、「なもみ太鼓の会」による『なもみ太鼓』の披露、開通パレードが行われました。



テープカット、くす玉開披



開通パレード



南県北広域振興局長 式辞



小田野田村長 祝辞



高橋県北広域振興局土木部長 事業経過報告



「なもみ太鼓の会」による『なもみ太鼓』披露



野田村のイメージキャラクター「のんちゃん」と寒締めほうれん草のイメージキャラクター「寒次郎くん」も参加

事業概要図



当該箇所は、東日本大震災発生時、野田村の市街地が津波で浸水し、国道等の主要幹線道路のネットワークが寸断されました。

このことを踏まえ、県道である主要地方道野田山形線を浸水想定区域外に付け替え、延長1,500m（うち橋りょう65m）を整備しました。

これにより、災害に強い道路にするとともに、野田村が進める城内地区防災集団移転促進事業（防集事業）と一体となったまちづくりの支援を図っています。

● 開通により期待される整備効果

効果1 安全で信頼性の高い道路ネットワークの形成

災害時の確実な緊急輸送や代替機能が確保されます。

効果2 安全・安心な通行の確保

東日本大震災津波相当の津波でも被災しない避難路としての道路が確保されます。

効果3 物流の効率化

補助幹線道路としての機能強化が図られ、野田漁港と内陸部への物流ルートとしてアクセス性が向上します。

復興道路等の整備による「ストック効果」を紹介します！

【第 15 回】

釜石道特集④

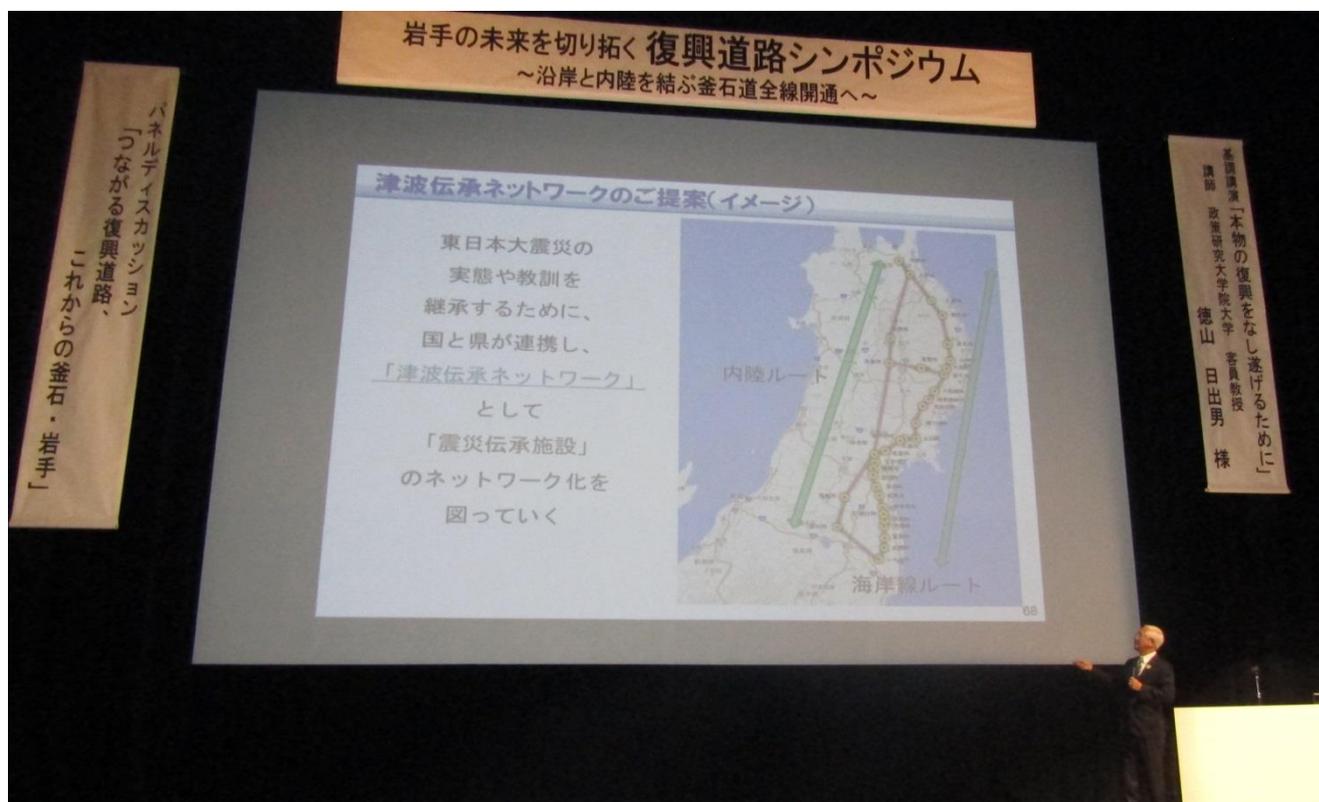
『岩手の未来を切り拓く復興道路シンポジウム

～沿岸と内陸を結ぶ釜石道全線開通へ～』を開催しました！

平成 31 年 1 月 19 日、『岩手の未来を切り拓く復興道路シンポジウム～沿岸と内陸を結ぶ釜石道全線開通へ～』を釜石市と共同で開催しました。

東北横断自動車道釜石秋田線（以下「釜石道」という。）は、今年度、国の復興道路・復興支援道路として初の全線開通が予定されており、開通によって、本県沿岸と内陸を結ぶ初の高速道路となります。

本シンポジウムは、復興道路・復興支援道路の事業化から着工、そして開通に至るまでの取組をお知らせするとともに、復興道路等のストック効果や今後への期待を市民、県民の皆さんから発信してもらうことを目的として開催した、本県で初の復興道路シンポジウムでした。当日は約 400 人の県民の皆様にお越しいただきました。



▲ 政策研究大学院大学 客員教授 徳山 日出男 氏（元国土交通事務次官）による基調講演

シンポジウムの概要

○オープニングイベント

両石虎舞（両石虎舞保存会）

○第 1 部 基調講演

テーマ 「本物の復興をなし遂げるために」

講師 徳山 日出男 政策研究大学院大学 客員教授（元国土交通事務次官）

○第 2 部 パネルディスカッション

テーマ 「つながる復興道路、これからの釜石・岩手」

コーディネーター 千葉 星子

パネリスト 岩崎 昭子（宝来館 女将）

岩間 英治（釜石大槌地区行政 事務組合消防本部 総務課長）

桜庭 吉彦（釜石シーウェイブスゼネラルマネージャー兼監督）

沼崎 健（元釜石東中学校生徒会長、語り部）

※敬称略 ※パネリストは「五十音順」

オープニングイベント 両石虎舞（両石虎舞保存会）

両石虎舞は航海の安全と大漁を祈願して江戸時代中期から踊り始めたと伝えられています。

東日本大震災津波の6日前に開通した釜石山田道路の開通式でも披露いただいております。講師の徳山氏も当時拝見されているとのこと。



基調講演 テーマ「本物の復興をなし遂げるために」

【講師】

徳山 日出男 氏
政策研究大学院大学 客員教授
(元国土交通事務次官)

【略歴】

東日本大震災津波の発災時の国土交通省東北地方整備局長。

当時、被災者救援の陣頭指揮を執られたほか、復興道路全線事業化やその後のかつてないスピードでの整備に多大な尽力をいただいた。

陸前高田市で整備中の東日本大震災津波伝承館のアドバイザーを引き受けていただくなど、現在も岩手の復興に携わっていただいている。



▲ 基調講演講師 徳山 日出男 氏

【主な内容】

- ・ 平成 23 年 3 月 5 日に開通した三陸沿岸道路釜石山田道路の開通式やその際に見た釜石市両石町の津波石が印象に残っている。
- ・ 復興道路の早期完成のためには、測量や設計、用地買収等の着工までのプロセスを極力短くする「即年着工」が必要だったが、地元の協力や熱意、国会の理解等が原動力になった。
- ・ 復興道路は続々と開通していくが、出来上がった道路をどう活用するか知恵を絞るとき。
- ・ 災害列島日本では、災害をどのように克服するかが課題。「東日本大震災津波での教訓」が国内外から求められている。災害の伝承も東北の使命。
- ・ 私も生涯、東北の復興に関わらせていただきたいと考えている。

パネルディスカッション テーマ「つながる復興道路、これからの釜石・岩手」

【コーディネーター】千葉 星子 氏
【アドバイザー】徳山 日出男 氏
【パネリストの主な発言内容】※敬称略、五十音順



▲ パネルディスカッション
左から、千葉 星子 氏、徳山 日出男 氏、岩崎 昭子 氏、沼崎 健 氏、桜庭 吉彦 氏、岩間 英治 氏



岩崎 昭子 (宝来館 女将)

津波があっても生き続けたかと、三陸の美しさと、夢のあるふるさとだということを若い人たちに伝えていきたい。



岩間 英治 (釜石大槌地区行政事務組合消防本部 総務課長)

自然災害が全国で発生している中、復興道路の完成により被災地にいち早く駆けつけることができる。



桜庭 吉彦 (釜石シーウェイブスゼネラルマネージャー兼監督)

ラグビーワールドカップは、釜石が世界に通じる日。防災という視点でも世界に発信する機会にしてほしい。これから道路がよくなって、もっと岩手や三陸が近くなることを東京などでもPRしていきたい。



沼崎 健 (元釜石東中学校生徒会長、語り部)

復興道路の完成によりアクセスが容易になるので、ツアーを誘致するなど、釜石市は震災と防災を学べるまちになってほしい。

県土整備部 県土政策研究会の取組

～将来の県土づくりを見据えて～

県土整備部では、今年度新たに、部内職員による「県土政策研究会」を設置し、県土整備行政に係る課題について研究活動を行ってきました。

12月17日に開催した報告会では、将来に向けた提言として、検討結果の報告が行われたところです。

以下では、今年度の取組状況の概要を報告します。

1 県土政策研究会設置の経緯

- 県土整備部では、東日本大震災津波や平成28年台風第10号等災害からの復興、社会資本の整備や維持管理など、直面するさまざまな課題に取り組んでいるところです。
- 加えて、将来を見据えた課題へ対応するため、今年度、部内横断的な検討組織として「県土政策研究会」を設置しました。
- 「インフラの利活用」と「東日本大震災津波災害に係る経験の伝承」という2つの課題をテーマに、7月から、本庁や広域振興局に所属する15名の職員が検討してきました。
- 部内での中間報告によりブラッシュアップを図り、12月17日には県土整備部職員を対象とした報告会を開催しました。



2グループから検討結果を報告



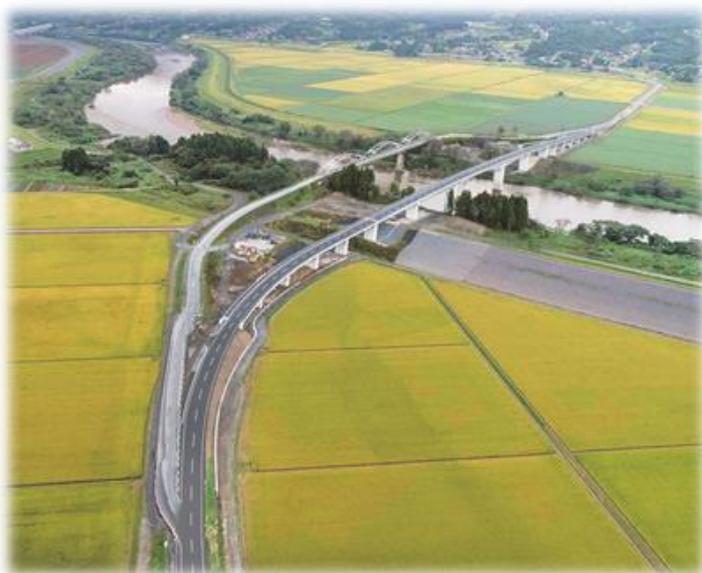
2 検討テーマ

【テーマ1】インフラの利活用

国などでは、インフラを観光資源として活用しようとする「インフラツーリズム」の取組が進められています。インフラツーリズムによって、インフラへの関心を高めるとともに、地域に人を呼び込むことが期待されます。

一方、本県では対応方針が整理されていないことから、取り組むに当たっての課題や実施方策の検討を行いました。

インフラツーリズムに取り組んでいる団体や観光関係団体への聞き取りなどを通じて分析を行い、インフラツーリズムの実践に向けて、導入の方向性や推進方策、実施フロー案などについて提言しました。



【インフラツーリズムの事例】

- 平成 30 年 10 月 30 日には、主要地方道一関北上線「柵の瀬橋」工区において、民間主催による現場見学ツアーが開催されています。
- 参加者からのアンケートでは、約 9 割の方から「今後同様のイベントに参加したい」と回答があり、関心の高さがうかがえます。

【テーマ2】東日本大震災津波災害に係る経験の伝承

未曾有の大災害である東日本大震災津波の発災直後における対応や、防潮堤の整備等大規模な事業を実施する中で得た技術やノウハウは、技術系職員にとって貴重な財産であり、本県が培ってきた知見や経験を後世に継承していくことが重要です。

そこで、復興の先も見据え、震災に関連する記録の継承や、職員の技術研鑽や情報発信等の活用方法の検討を行いました。

検討に先立ち、部内の技術職員を対象に、東日本大震災津波の震災復興業務に係る技術的経験のうち「伝え手として何を伝えたいか」「受け手として何を知りたいか」を調査しました（調査結果については下記を参照）。

調査結果を踏まえ、既存資料を活用しつつ必要な記録をルールに沿って作成し残すことや、これら記録の一元的管理の必要性、また、職員同士の技術継承の機会創出などを提言しました。

【調査結果で多かった意見】

- 伝え手として伝えたいこと、残したいこと
 - 震災当日の状況
 - 地元調整に係ること
 - 国、市町村との協議に係ること
- 受け手として知りたいこと、教えてほしいこと
 - 震災当日の状況
 - 地元調整に係ること
 - 震災から査定までの流れ

このほか、経験者の生の声を直接聞きたいという意見、事業の着手から完了までの記録がほしいという意見もありました。